

## 情報構造と英語の語順

百武玉恵 (九州ルーテル学院大学)

### 1. はじめに

英語の主語、動詞、目的語といった構成素の配列は厳密に規定されており、語順を誤ると意味が正しく伝わらないとされているが、その一方、文は話し手から聞き手への情報の伝達であるとする情報構造の考えでは、この語順は必ずしも絶対的とは言えない。時間や場所を表す修飾語句の場合、英語では小さい単位から大きい単位へと並べるのが一般的な文法規則だが、情報構造の観点から捉えると、大きい単位から小さい単位へと並べる方がよいとされている。

(1) I live at 252 Linden Street.

(From most specific to most general)

(Celce-Murcia & Larsen-Freeman 1999)

(2) John sent the book to New York to Bill.

(The order of successive or secondary positive prepositions is preferably from the general to the specific.) (Gruber 1976)

(1) はいわゆる文法規則に則った語順で、252番地はリンデン通りより小さい単位であり、Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999) は、具体的なもの (252) から大まかなもの (Linden Street) へと並べる、と述べている。一方、(2) では、大きい単位 (New York) から小さい単位 (Bill) の順で並んでおり、Gruber (1976) は、連続したもしくは二次的な前置詞句の語順は大まかなものから具体的なものへというのが好ましい、と述べている。しかし、他方では同時に、目標を表す表現について、その前置詞句の生起する位置によって非文になる場合 (2b) や共起する前置詞によっては前置詞句の生起する位置が移動する場合 (2c) の例を示して、語順の問題は前置詞の問

題であると捉えているかのようにも考えられる。

- (2) a. John sent the book to New York to Bill.  
 b. \* John sent the book to Bill to New York.  
 c. John sent the book to Bill in New York.

(Gruber 1976)

小論では、語順の問題を文法と情報の両面から観察し、どのような場合に情報構造の語順が優先するのかについて、百武 (2012) で示した以下の仮説を検証し、その妥当性を主張する。

仮説 1 : 話し手の伝達内容は聞き手の情報のなわ張りの外にある、と話し手が判断するとき、情報の配列は「粗→密」(the general → the specific) となる。

仮説 2 : 話し手の伝達内容が話し手のなわ張りの外にあるとき、情報の配列は「粗→密」(the general → the specific) となる。

## 2. 「粗密」語順の文構造

英語の補文はすべての構成素が the specific → the general の順に並んでいると考えがちだが、文構造を精緻に観察するとそうではないことがわかる。[副詞+前置詞句] と [代名詞/固有名詞+前置詞句] を例にとってみよう。

### 2. 1. 同一指示の場所句 [adverbials + PP]

- (3) He is out in the field. (安井 1996)  
 (4) The house is up on the hill. (*ibid.*)  
 (5) Down under the house it was cool. (Huddleston & Pullum-2002)  
 (6) My ball went right over into the neighbour's garden. (*ibid.*)  
 (7) I think dad may be round at the pub. (*ibid.*)  
 (8) Could you put it here/there, on the coffee table. (*ibid.*)  
 (9) I would love to go abroad this year, perhaps to France. [Cobuild<sup>5</sup>]  
 (10) Somewhere in Ian's room were some of the letters that she had sent him. (*ibid.*)

(下線は筆者)

(3) では、彼がいる場所を家の中でなく外であるという意味の副詞 *out* で漠然と表し、続いて、それは畑であるという意味の前置詞句 *in the field* で具体的な場所を特定している。(4) から (10) も同様に、漠然と場所を表す副詞に具体的な場所を表す前置詞句が後続しており、副詞と前置詞句の語順を入れ替えると非文になる。

### 2. 2. 同一指示の名詞句 [NP + PP]

- (11) He caught me by the arm. (綿貫ほか 2000)  
 (12) The brick hit John in the face. (*ibid.*)  
 (13) She kissed him on the cheek. (Huddleston & Pullum 2002)  
 (14) She praised him for his sincerity. (*ibid.*)  
 (15) She envied John for his success. (Quirk *et al.* 1985)  
 (下線は筆者)

(11) では、「彼が私 (me) を捕まえた」という情報をまず提示し、続いて、彼が捕らえた部位を前置詞句 *by the arm* で表している。ここでは「私」という大まかな情報のあとに「私の腕」という具体的な情報がきており、両者は入れ子の構造になっている。(12) から (15) も同様に、大まかな情報を表す代名詞/固有名詞に、具体的な情報を表す名詞句を内包する前置詞句が後続しており、両者を入れ替えることはできない。

他方、「粗密」の二重構造を持つ (11) から (15) の構文は、Huddleston & Pullum (2002) が指摘するように、以下のような単純な所有格代名詞付き名詞句に書き換えることができる。

### 2. 3. 書き換えが可能な構文 [NP + PP] → [NP]\*

- (11) a. He caught me by the arm.  
 b. He caught my arm.  
 (12) a. The brick hit John in the face.  
 b. The brick hit John's face.  
 (13) a. She kissed him on the cheek.  
 b. She kissed his cheek.

- (14) a. She praised him for his sincerity.  
 b. She praised his sincerity.  
 (15) a. She envied John for his success.  
 b. She envied John's success.

### 3. 語順に関わる先行研究

補文中の構成素の語順については、これまでさまざまな研究が行われてきたが、ここでは本研究のきっかけとなった論文をはじめ、小論に直接関係と思われる研究をいくつか紹介したい。

#### 3.1. 浅田 (1981, 1982, 1986a, 1986b)

多重の場所指定：統語的には文中の一つでよい要素を何らかの必要からそこに同類の要素を重ねる場合には、情報伝達ないし認知のプロセスの上での原理に従って大まかな位置（大単位）を先に、より厳密な位置（小単位）をその後に置く。

(浅田 1986b)

粗密の原理：文の同類要素に関する一般原理は、まず「大まかな情報」を伝えてから、必要によって、その点についての「より詳しく細やかな情報」を伝える、ということが自然な順序である。

(浅田 1986a)

- (16) The duck swam from the shore from the tree. (Gruber 1976)  
 (17) Trevor has gone to Wembley to the Cup Final. (Bennett 1975)  
 (18) I live in this building in Apartment #207. (浅田 1986b)  
 (19) He is a nice chap, your brother. (Dik 1978)  
 (20) I didn't like it very much, that book of yours. (*ibid.*)

浅田は一連の研究で、情報を正しく伝えるためには、いきなり核心に触れるのではなく、誰もが共有しているより一般的な事柄から始めて、核心部分に入るのが常道であることを示唆した。この原理は日本語、英語に限らず言語一般に共通していると考えられる。

#### 3.2. 工藤 (2006)

場所格交替：場所格交替の本質は、「図と地の原則」や「焦点能力」などの人間の認知能力一般が構文の意味決定に深く関わっている。また認知的際立ちの高さはある出来事に含まれる複数の事態の認知順序によって決定され、それが文における各項の語順的な先行関係となって言語表現に現れる。

- (21) a. John cleaned dishes from the table.  
 b. John cleaned the table of dishes.

(Levin 1993)

工藤 (2006) は、焦点がどれに当たるかによって場所格は移動することから、構成素の語順には話し手・書き手の認知能力が大きく関わっていることを示している。

#### 3.3. 中島 (2000)

文法的語順：個々の文が適格になるための、語句の配列に関する形式上の条件を定めたもの

$S = NP + VP$

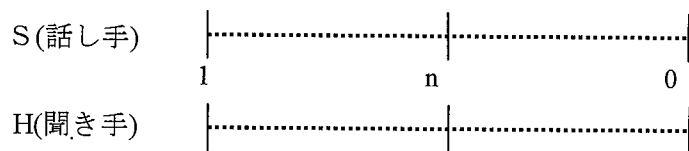
語用的語順：文が実際の発話状況や談話の中で適切に用いられるための語句の配列に関する語用論上の条件を定めたもの  
 文 = 既知情報 → 新情報

中島 (2000) は、文法的語順と語用的語順は性質を異にするものであると述べ、さらに、認知的際立ち、情報が聞き手の意識にあるかないかと密接に関係している、とも述べている。前節 2.3. で提示した、1つの事実を記述するための2つの構文は上述の2つの語順を具現化したものであることがわかる。実際に表出されるのはどちらか一方の構文であるので、その選択の基準となるものが必要となる。次節では、その基準のひとつと考えられる情報のなわ張りについて紹介する。

#### 4. 情報構造に関わる先行研究 (神尾 1979, 1990, 1998)

前節で、情報の配列には認知の順序や話し手・聞き手の意識が大きく関わっていることを示した。福地 (1985) によると、情報は談話という場面で、話し手の情報が効率よく相手に伝わるように、旧情報から新情報へ流れるように配置されると述べられている。神尾 (1979) は、談話の主軸を、情報の新旧から談話の担い手である話し手と聞き手にシフトして、談話の構成素である情報はそのどちらかに帰属するとし、神尾 (1998) で文の分析を行った。

神尾 (1990) は、情報のなわ張りの概念は情報の所有権をも含むと述べて、文の表現形式によって所有権の有無を判断できると主張した。



(神尾 1998:16)

情報のなわ張りは数値で表すことができる。上の尺度上に、ある定められた点  $n$  があり、 $n$  よりも左の部分が話し手および聞き手の情報のなわ張りを表し、右の部分が両者のなわ張りの外部を表す。

##### 4.1. 英語におけるなわ張りの内と外の判断基準

与えられた情報が話し手または聞き手のなわ張りに入るかどうかの条件は言語間で若干の違いがあるが、ここでは英語の場合に限って紹介する。

###### 4.1.1. 情報が話し手または聞き手のなわ張りに入るための条件

- 情報が話し手または聞き手の内的直接体験によって得られたものであること。
- 情報が話し手または聞き手の外的直接体験によって得られたものであること。情報が他者から得られたもので、話し手または聞き手が信頼しうるとみなすものである場合を含む。
- 情報が話し手または聞き手の専門的領域またはその他の熟達した領域に関わるものであること。
- 情報が話し手または聞き手にとってきわめて個人的な事柄に関するも

のであること。話し手または聞き手自身に関する情報を含む。

(神尾 1998)

上述の各条件を満たした場合、上に図示した尺度上で + 0.5 ポイントが与えられる。次に、「情報のなわ張り理論」には 4.1.1. の条件に加えて、それとは反対の働きを持つメタ条件が必要とされる。

###### 4.1.2. メタ条件

- 情報は話し手または聞き手がそれを主張する十分な証拠を持たない場合に話し手または聞き手の尺度上で 0 に近づくように移動する。
- 話し手または聞き手にとって得がたい情報は話し手または聞き手の尺度上で 0 に近づくように移動する。

(神尾 1998)

上述の各条件を満たした場合、上の尺度上で - 0.4 ポイントが与えられる。さらに、尺度には 4.2. に示すように上限、下限が設けられ、与えられた情報は 1 と 0 の間に位置づけられる。

##### 4.2. 条件適用の原理

- 条件 (4.1.1.) のポイントは最初値 0、最大値は 1 とする。
- メタ条件 (4.1.2.) のポイントは最小値 0 とする。
- 情報のなわ張りの下限値は 0.6 である。

(神尾 1998)

上述の条件を発話文に当てはめると、次のような情報のなわ張りと言話形の関係が見えてくる。

## 4.3. 状況と発話形

状況	定義	発話形
A	$1 = S > H < n$	直接形 (情報の最も明確な主張をなす)
B	$1 = S = H$	直接形 ( " )
BC	$1 = S > H \geq n$	NYNQ 形 (Negative Yes-No Question)
CB	$n \leq S < H$	NYNQ/DTQ 形 (Declarative with a Tag Question)
C	$n > S < H = 1$	間接形 (発言を不明確にするあるいは和らげる表現を含む)
D	$n > S \geq H$	間接形 ( " )

(神尾 1998)

上述の「直接形」とは、情報の最も明確な主張をなす発話形で、形式上は言い切りの形をとっている。したがって、seem, appear, look like; I think, I believe, I guess, I hear; probably, apparently, maybe など、発話のなす主張を不明確にするような要素を含んではならない。他方、「間接形」は発言を不明確にし、あるいは和らげる働きをもつ前述のような表現を含むものである。両者の中間には、NYNQ 形 (否定疑問文) と DTQ 形 (付加疑問文) がある。

上に示すように、英語における発話の状況と発話形は6つに区分することができる。大まかに分けると、話し手が直接形、NYNQ 形、DTQ 形を用いた場合、情報のなわ張りは話し手に属し、間接形を用いた場合は話し手のなわ張りに属さないことになる。次に具体例を挙げて説明する。

## 4.4. 基本発話形の具体的分析

(22) I am nauseated. (直接形)

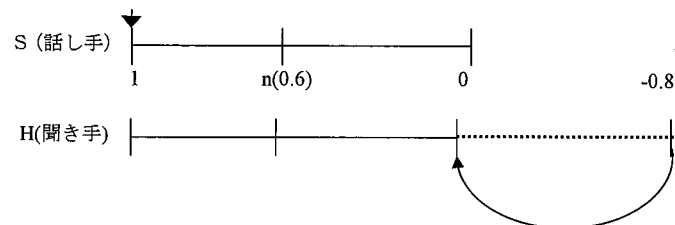
(わたし、吐き気がする)

(神尾 1998)

$$S = 0.5 + 0.5 = 1 \quad (\text{条件 4.1.1.a, d})$$

$$H = 0 - 0.4 - 0.4 = -0.8 \rightarrow 0 \quad (\text{メタ条件 4.1.2.a, b})$$

$$1 = S > H < n$$



この発話の話し手は内的直接体験により「自分が吐き気がする」という情報を得たので、条件 (4.1.1.a) が適用される。また、この情報は明らかに個人的事柄なので、条件 (4.1.1.d) も適用され、その結果、この情報は話し手の尺度上で1の値を取り、話し手のなわ張りに属すると判定される。一方、聞き手が単なる知人である限り、聞き手に当てはまる条件はないので、聞き手の尺度上で (22) の表す情報がとる値は0である。この情報は聞き手が明確に知ることのできない情報であり (他人が吐き気を催しているか否かは外見からはわかり難い)、さらに本人に聞かなければわからない情報であるという意味で本来得がたい情報であるため、メタ条件 (4.1.2.a, b) が適用され、聞き手の尺度上の値は  $-0.8$  となるが、条件適用の原理 (4.2.b) によりその値は最終的に0とされる。したがって、この情報は聞き手のなわ張りには属しないと判定される。

(23) It looks like this is a good college. (間接形)

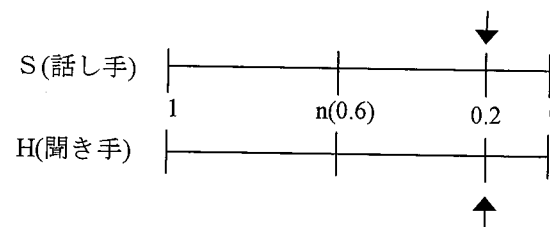
(ここはいい大学みたいだな)

(神尾 1998)

$$S = 1 - 0.8 = 0.2 \quad (\text{条件 4.1.1.a, b, メタ条件 4.1.2.a} \times 2)$$

$$H = 1 - 0.8 = 0.2 \quad (\text{条件 4.1.1.a, b, メタ条件 4.1.2.a} \times 2)$$

$$n > S = H$$



話し手はごく普通の人物で、ある大学にやって来てその様子を見て (23) のような感想をもちたとする。この場合、話し手に関して当てはまる条件は、内的 (「よい大学だ」という感想) および外的直接体験の条件 (4.1.1.a, b) である。しかし、話し手は大学の評価についてはまったくの素人であり、また大学がよいかどうかは外見からは判断できないことなので、どちらの条件に対してもメタ条件 (4.1.2.a) が働く。そのため、話し手の尺度上における「この大学はよい」という情報のとる値は  $1 - 0.8 = 0.2$  である。他方、(23)

の発言を聞いた聞き手も同様の人物であるとすれば、同じく、その尺度上におけるこの情報が取る値は0.2となる。したがって、この情報は話し手にとっても聞き手にとってもなわ張り外と判定される。

このように、話し手の用いる表現によって、話し手もしくは聞き手の情報のなわ張り上の位置を予測し、測定できると神尾は主張している。次節では、「情報のなわ張り理論」を用いて仮説の検証を行う。

## 5. 結果および考察

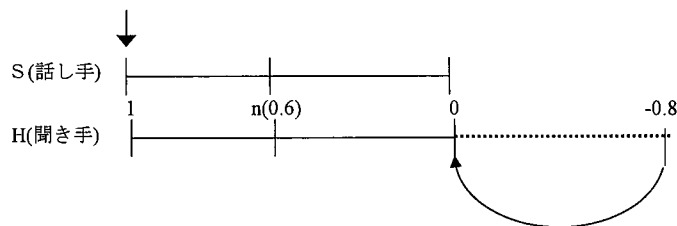
### 5.1. [仮説1] の検証

(24) I live in this building in Apartment #207. (18)

(私はこのアパートの207号室に住んでいる者です。)(直接形)

$$S = 0.5 + 0.5 = 1 > n \quad (\text{条件 4.1.1.b, d})$$

$$H = 0 - 0.4 - 0.4 = -0.8 \rightarrow 0 < n \quad (\text{メタ条件 4.1.2.a, b})$$



この発話は直接形で話されており、まず話し手の縄張りに属すると予測される。話し手はアパートの住人、聞き手はこの文を引用した論文の著者、浅田壽男氏で、二人には面識がない。この場合、話し手に当てはまる条件は、外的直接体験と話し手にとってきわめて個人的な事柄に関するものの条件 (4.1.1.b, d) である。その結果、この情報は話し手の尺度上で1の値を取り、予測どおり話し手のなわ張りに属すると判定される。一方、聞き手は話し手についての情報を全く持っておらず、メタ条件 (4.1.2.a, b) だけが適用される。そのため、聞き手の尺度上における値は-0.8となるが、条件適用の原理 (4.2.b) によりその値は最終的に0とされる。したがって、この情報は聞き手のなわ張りには属しないと判定される。

次に、(24)の発話内容は粗 (this building) から密 (Apartment #207) へと並んでいる。文法的語順の規則に従えば、I live in Apartment #207 of this building. と表現されるであろうが、話し手と聞き手は初対面であり、話し手はこの情報が聞き手のなわ張りには属さないことを知っているので、「粗密」の語順を選択したと考えられる。よって、[仮説1]は証明されたといえるだろう。

(25) Mason said, "...Two people may have figured in the deal, a Sindler Coll, who lives in the Everglade Apartments in two hundred and nine, and an Esther Dilmeyer, who's in the Molay Arms Apartments."

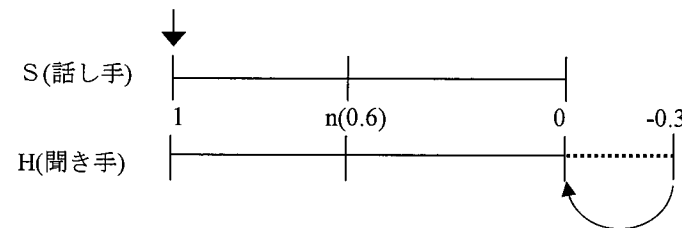
(Gardner, E. S., *The case of the silent partner*)

(下線は筆者)

(メイソンは言った。「…二人の人間がこの事件には関わっているようだ。ひとりにはシンドラー・コールという男、エバークレイド・アパートの209号室に住んで、もうひとりにはエスター・ディルメヤーという女でモーレイ・アームズ・アパートに住んで。」)(直接形)

$$S = 0.5 + 0.5 = 1 > n \quad (\text{条件 4.1.1.b, c})$$

$$H = 0.5 - 0.4 - 0.4 = -0.3 \rightarrow 0 < n \quad (\text{条件 4.1.1.c, メタ条件 4.1.2.a, b})$$



(25)は、私立探偵メイソンが別の私立探偵に仕事の協力を電話で依頼している場面である。主節には推量を表す法助動詞 may が用いられているが、ここでは、事実関係を述べている関係詞節に注目する。a Sindler Coll を先行詞とする関係詞節は直接形で話されており、話し手の縄張りに属すると予測される。メイソンは当該事件に探偵として関わっているため、話し手に当てはまる条件は、外的直接体験と話し手の専門的領域に関わるものの条件 (4.1.1.b, c) である。その結果、この情報は話し手の尺度上で1の値を取り、

予測どおり話し手のなわ張りに属すると判定される。一方、聞き手は話し手の伝える情報を全く持っていないが、メイソン同様探偵という職業上、聞き手の専門的領域に関わるものの条件 (4.1.1.c) が適用され、聞き手の尺度上で 0.5 の値を取る。加えて、聞き手は当該事件にまだ関わっていないので、メタ条件 (4.1.2.a, b) が適用される。そのため、聞き手の尺度上における値は -0.3 となるが、条件適用の原理 (4.2.b) によりその値は最終的に 0 とされる。したがって、この情報は聞き手のなわ張りには属しないと判定される。

次に、(25) の場所句は粗 (in the Everglade Apartments) から密 (in two hundred and nine) へと並んでいる。これは明らかに文法的語順に反するものであるが、話し手はこの伝達内容が聞き手のなわ張りの外にあることを知っているので、「粗→密」の配列を選択したと考えられる。

(26) Mildreth Faulkner, seated at her desk in the glass-enclosed office of the Faulkner Flower Shops, selected a blue crayon of exactly the right shade.

(Gardner, E. S., *The case of the silent partner*)

(下線は筆者)

(ミルドレス・フォークナーは、フォークナー花店のガラスで囲まれたオフィスの机に座って、その陰を正確に描くための青のクレヨンを選んだ。)

(26) は *The Case of the Silent Partner* の冒頭部分である。下線部の場所句は、密→粗 (at her desk → in the glass-enclosed office → of the Faulkner Flower Shops) と文法的語順に則って配列されている。ここでは、書き手 (話し手) は特定の読み手 (聞き手) を想定しておらず、相手の意識や認知能力を考慮する必要がない。したがって、語用論的語順は採用されないと考えられる。

## 5.2. [仮説2] の検証

次に、話し手の伝達内容が話し手のなわ張り内にあるか否かで、情報の配列が異なる事例を示す。

(27) Marion McManus, the wife of television actor, Mark McManus, died

today in Glasgow after a long fight against cancer. She was forty. The couple married in 1986 having worked together on the television series, Taggart, on which she was a wardrobe assistant. Scottish Television's Controller of Drama, Robert Love praised her for her bravery and praised her husband for the tremendous support he had given her.

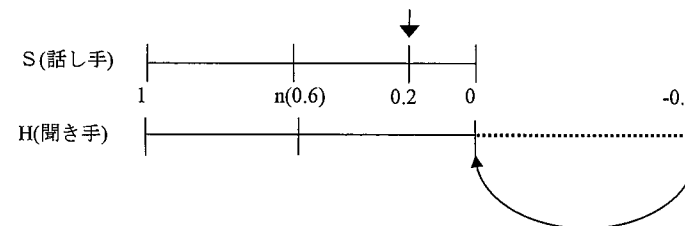
(Scottish TV - news scripts) [BNC]

(下線は筆者)

(テレビ俳優のマーク・マクマナスの妻、マリオン・マクマナスさんが、癌との長い戦いの末今日グラスゴーで亡くなりました。40歳でした。二人は1986年に結婚し、テレビシリーズ「タガート」で、彼女は衣装係として一緒に働きました。スコティッシュ・テレビドラマ部門のロバート・ラブ氏は彼女の勇気をたたえ、また夫のマクマナス氏が差し伸べた多大な支援を讃えました。)(直接形)

$S = 0.5 + 0.5 - 0.4 - 0.4 = 0.2 < n$  (条件 4.1.1. a, b, メタ条件 4.1.2.a×2)

$H = 0 - 0.4 - 0.4 = -0.8 \rightarrow 0 < n$  (メタ条件 4.1.2.a, b)



(27) は発話文ではなくニュース原稿である。全体が直接形で表されているので話し手のなわ張りに属すると予測される。下線部を含む Robert Love praised her for her bravery は praise という心理状態を表す心的動詞を用いた心理発話であり、(神尾 1998) の「英語における直接形の心理発話が自然なのは、話し手が主語の指す人物の心理状態を表す情報に直接接していると思なされる場合である」という記述から判断すると、ニュースキャスターは情報に直接接しているわけではないが、この場合、報道の性格上断定的な表現を用いることを求められているので「直接接していると思なされる場合」に相当すると考えられる。したがって、この情報は話し手の内的直接体験に

よって得られたものであると言えるだろう。よって、条件 (4.1.1.a) が適用される。また、「他者から伝えられた情報はそれが信頼すべきものであれば情報をなわ張り内に入れるように働く」さらには「非常に多くの心理発話に関して英語ではこの条件が働く」という記述から外的直接体験の条件 (4.1.1.b) が適用され、話し手の尺度上で1の値を取る。しかしながら、「話し手、つまりニュースキャスターが主語の指す人物の心理状態を表す情報に直接接している」わけではなく、「話し手がそれを主張する十分な根拠を持つ情報である」とは言いがたいので、どちらの条件に対してもメタ条件 (4.1.2.a) が適用され、その尺度上における値は0.2となる。情報のなわ張り下限値は0.6であるので、この情報は、表面的には直接形を使用しているが、話し手のなわ張りに属しないと判定される。

次に、下線部を含む Robert Love praised her for her bravery は粗 (her) から密 (her bravery) へと並んでいる。この表現は、Robert Love praised her bravery と単純な構造でも言い換えることが可能であるが、あえて「粗密」の語順を選択したのは、この情報が話し手のなわ張りの外にあるからではないかと考えられる。よって、[仮説2] は証明されたといえるだろう。

(28) Voice over:

Lynn is a popular nurse at St. Andrews. Staff and residents have been praising her bravery in trying to stop the thief.

Male speaker:

She's very caring and popular all the residents are concerned.

Voice over:

Police are now appealing for witness to the attack. This is the fourth car to be stolen from the site since October.

(Central television news scripts) [BNC]  
(下線は筆者)

(リポーター：リンはセント・アンドリュース病院の人気看護師です。  
病院スタッフも患者も泥棒を止めようとした彼女の勇気を賞賛しています。

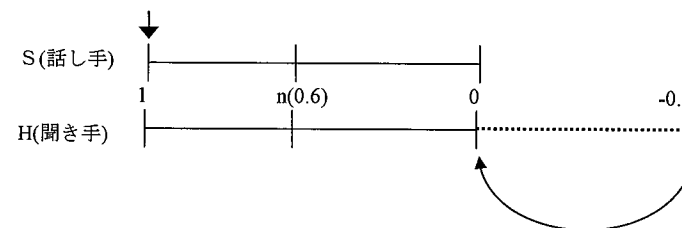
男性：彼女はとても面倒見がよく人気があり、住人はみんな心配しています。

リポーター：警察は今、事件の目撃者を捜しています。10月からこの

現場で車が盗まれたのはこれで4度目です。(直接形)

$$S = 0.5 + 0.5 = 1 > n \quad (\text{条件 4.1.1. a, b})$$

$$H = 0 - 0.4 - 0.4 = -0.8 \rightarrow 0 < n \quad (\text{メタ条件 4.1.2.a, b})$$



(28) は事件現場からの中継のスク립トで、話し手は事件現場にいたことが明らかである。この談話は (27) と同様にニュース原稿で、全体が直接形で表されており、話し手のなわ張りに属すると予測される。(27) と異なるのは、リポーターが現場で直接体験していることが明らかだということである。したがって、この情報は話し手の内的直接体験と外的直接体験によって得られたものであるため条件 (4.1.1.a, b) が適用され、話し手の尺度上で1の値を取る。よって、この情報は予測どおり、話し手のなわ張りに属すると判定される。

また、リポーターが Staff and residents have been praising her bravery と「粗密」の構文でなく単純な構文を使っているのは、伝達内容が話し手のなわ張り内にあるため、「粗密」の配列が要求されないからであると考えられる。

## 6. おわりに

小論では、補文中に現れる同類要素の語順について、統語的側面と語用的側面の両方から考察した。第1節では、同類要素の語順は「具体的なもの→大まかなもの」「大まかなもの→具体的なもの」の2通りが存在することを示し、「大まかなもの→具体的なもの」すなわち「粗密」の語順が選択される場合の条件を仮説として提示した。第2節では、「粗密」の語順が統語的に規定される構文、補文を「粗密」の二重構造と単純な構造の2通りに書き換えられる構文を紹介した。第3、4節では、語順と情報構造に関わる先行研究を紹介した。第5節では、第4節で紹介した「情報のなわ張り理論」を用いて補文



中の同類要素の語順を分析し、仮説の検証を行った。その結果は以下のよう  
にまとめることができよう。

談話において話し手は、その伝達内容が自分のなわ張りに属する情報か  
否かを区別して語句の選択・配列を行い、文を構成する。同時に、聞き  
手のなわ張りに属する情報なのか、そうでないのかも考慮して、情報の  
配列を決定する。

本研究では、仮説の検証に一部ニュース原稿を用いたが、本来ならば談話  
を使用すべきである。また、仮説の妥当性を高めるためには、「粗密」の語順  
が選択される状況では「密粗」の語順が排除されるもしくは「密粗」の容認  
度が下がることを示さなければならない。今後はより多くの事例を収集し、  
インフォーマントの意見を取り入れた分析を重ねて、同類要素の語順が持つ  
特性を明らかにしていく必要がある。

## Information Structure and English Word Order

Tamae HYAKUTAKE (Kyushu Lutheran College)

This paper deals with word order of related constituents in English  
complements from the aspect of information structure. English constituents  
in complements are grammatically established to put in order the  
information from the specific to the general. In approaches of information  
structure and cognitive linguistics, however, it is said to be natural and  
rational to arrange them from the general to the specific.

The objective of this study is to find out in what case either of these  
contradictory rules is applicable. First, two hypotheses where the latter rule  
is applied are proposed. Second, some sentence structures in which the  
order of "from the general to the specific" is syntactically fixed are  
presented. Third, some research regarding cognitive processes and word  
order precedent to this study are discussed. Furthermore, the territory of  
information and its criteria by Kamio (1998), which are adopted for  
discourse analysis, are introduced. In information structure, the speaker and  
the hearer play important roles; for the speaker's judgment and the  
hearer's awareness highly influence the structure they use. Finally, the two  
hypotheses are examined in accordance with the criteria of the territory of  
information. Then the following result is obtained: The speaker constructs  
his/her discourse judging whether the information to transmit is within  
his/her territory of information as well as it is within the hearer's one.

Key words: English usage, word order, information structure, discourse,  
territory of information

## 【注】

\* (11 a, b) から (15 a, b) に示す書き換え文の意味の違いについて、Huddleston & Pullum (2002) は特に触れていないが、池上 (1991) は「人間を表している項が言語では特に何か特別な扱いを受ける傾向がある」と述べ、以下のような説明をしている。

- (1) a) I struck Bill on the head.  
b) I struck Bill's head.  
(2) a) \* John struck the nail on the head.  
b) John struck the head of the nail.  
(3) a) \* John struck Bill on the bag.  
b) John struck Bill's bag.

同じような形式で表された (1) ~ (3) で、(1 a) は適格文と判断されるのに対し、(2 a) (3 a) は不適格文と判断される理由は、前置詞句内の名詞が不可分の所有 (物) か可分の所有 (物) かによる。つまり、身体の一部と判断され切り離すことができない (1 a) のみが a) 型の構造を許され、人間ではなかったり人間から切り離しても存在の意味が失われないようなものにはこの構造が使えない。さらには、形式の差は意味の差と密接な関係を持っている。つまり、b) 型の表現は <行為> をそれがどこに向けられたかとの関連で捉えただけのニュアンスであるが、a) 型はその行為がそれを受けた人間に人格的な影響を与えたというニュアンスを含む。それは a), b) を受動態で表すと明らかになる。'Bill was struck on the head' では、影響が人物全体に及んだことが感じとれ、'Bill's head was struck' では、頭だけに影響が及んだと感ぜられる。

池上が示す意味の違いが情報構造ではどのような違いとして表出するかは今後の研究課題となる。

## 【参考文献】

- 浅田壽男. (1981). 「ENVY の語法」『英語教育』第 29 巻第 12 号、pp.80-83.  
Asada, H. (1982). Movement and word order of two constituents of the same formal type. *Kansai Linguistic Society* 2, pp.31-39.  
浅田壽男. (1986a). 「語順を決定する一原理—粗密の情報」『北九州大学外国学部紀要』第 57 号、pp.37-56.  
浅田壽男. (1986b). 「多重の場所指定」『英語青年』第 132 巻第 3 号、pp.14-16.  
Bennett, D. C. (1975). *Spatial and temporal uses of English prepositions*. London: Longman.  
Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman. (1999). *The grammar book* (2nd ed.). Boston: Heinle & Heinle.  
Dik, S. C. (1978). *Functional grammar*. Amsterdam: North-Holland.  
福地 肇. (1985). 『談話の構造』(新英文法選書 10) 東京: 大修館書店.  
Gruber, J. S. (1976). *Lexical structures in syntax and semantics*. Amsterdam: North-Holland.  
Huddleston, R. and G. K. Pullum. (2002). *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.

- 百武玉恵. (2012). 「情報構造からみた英語語順の考察」『南榮技術学院人文休閑學群 2012 異文化交流国際學術研究会 研究会論文集』pp.130-139.  
池上嘉彦. (1991). 『(英文法) を考える』東京: 筑摩書房.  
Kamio, A. (1979). On the notion Speaker's territory of information. In G. Bedell, E. Kobayashi, & M. Muraki (Eds.), *Explorations in linguistics: Papers in honor of Kazuko Inoue* (pp. 213-231). Tokyo: Kenkyusha.  
神尾昭雄. (1990). 『情報のなわ張り理論』東京: 大修館書店.  
神尾昭雄. (1998). 「情報のなわ張り理論: 基礎から最近の発展まで」神尾昭雄・高見健一『談話と情報構造』(日英比較選書 2) (pp. 1-111) 東京: 大修館書店.  
工藤和也. (2006). 「場所格交替における文の認知的焦点位置と動詞の語彙概念構造の考察」『立命館英米文学』第 15 号、pp.102-131.  
Levin, B. (1993). *English verb classes and alternations*. Chicago: University of Chicago Press.  
中島平三. (2000). 「語順から言語能力と言語運用を考える」『言語』第 29 巻第 9 号、pp.48-53.  
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. Essex: Longman.  
綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘. (2000). 『ロイヤル英文法』(改訂新版) 東京: 旺文社.  
安井稔. (1996). 『英文法総覧』(改訂版) 東京: 開拓社.

【言語資料】([ ] 内は本稿で用いた略称)

- Collins Cobuild advanced learner's English dictionary* (5<sup>th</sup> ed.). (2006). Glasgow: Harper Collins. [Cobuild<sup>5</sup>]  
小学館コーパスネットワーク BNC Online (<http://www.corpora.jp/>) [BNC]

(原稿受理 2012 年 5 月 31 日)